

令和2年度 第3回松本市地域づくり市民委員会 会議要旨

開催日時 令和2年11月27日（金曜日） 午後3時から午後5時00分まで

開催場所 大手公民館 2階大会議室

出席者（敬称略）

委員 降旗都子（委員長）、丸山宗志（副委員長）、内山博行、倉田美智子、
大門千恵美、臼井和夫、山下京子、鳥羽弘幸、窪田隆彦、倉澤 聡、赤羽 勝、
濱由佳子、小林 修、松山紘子
（欠席 相原功子、久保 愛）

事務局 地域づくり課 課長 高橋伸光、協働推進担当課長 清澤明子、
課長補佐 廣田圭男、協働推進担当主査 柳本真里、
地域づくり担当主査 床尾拓哉

1 開会

（降旗委員長）

2 あいさつ

（降旗委員長）

- ・ またコロナが流行ってきている。公民館でもなかなかイベントを開催できない状況
- ・ 昨日も会議があって出席したが、地域のつながりのためには、思い切って実施することも必要ではないかという意見も出ていた。
- ・ 本日はそういった地域の現状もふまえながら、議論をお願いしたい。

3 第2回会議録の確認について

（降旗委員長）

- ・ 事前に修正等の申し出なし。このまま確定としたい。

<意見等>

- ・ なし
→確定版を市公式ホームページに掲載

4 会議事項

(1) 意見交換（ワールド・カフェ）

（降旗委員長）

- ・ 前回のワールド・カフェから6つのキーワードを抽出した。今回それらをさらに深めるため再度ワールド・カフェを行う。

（丸山副委員長）

- ※ ワールド・カフェの進め方について説明
- ※ 3テーブルに分かれ、ワールド・カフェ（3ラウンド）を実施

<意見等>

別紙「ワールド・カフェのまとめ」のとおり

(2) 今後の進め方について

(降旗委員長)

- ・ 今回6つのキーワードについて話し合ったが、今日出された意見を参考にして、さらにテーマを絞り込んでいきたい。
- ・ 次回までに2～3つ程度にまで絞りたいと思うがいかが。

<意見等>

【テーマの絞り方について】

(小林委員)

- ・ どのようなテーマに絞るのか。絞るためのディスカッションが必要ではないか。
- ・ 今の時代は家族も隣近所もバラバラ。地域で生活する人がいない。そういったなかで、人と人をどうつなげるかが一番の問題
- ・ 団塊より上の世代は、古き良き時代のつながりを求めるが、若い世代は冷めている。そういった時代認識のもとで適切なテーマを選ばなければならない。
- ・ 「人材育成」「多世代参加」といったテーマがふさわしいのか疑問

(丸山副委員長)

- ・ 6つのテーマのいずれかをピックアップするというよりも抽象するイメージ。1つ、2つを選んで捨象するわけではなく、全体をカバーできるよう抽象していく。

(小林委員)

- ・ 難しいと思うがうまくやってもらいたい。

(降旗委員長)

- ・ 了解した。

【地域の「場所性」について】

(倉澤委員)

- ・ 地域には「場所性」がある。「場所性」を考慮に入れると、もう少し話がしやすくなるのではないか。

(降旗委員長)

- ・ 了解した。検討したい。

(3) 今後のスケジュールについて
(事務局)

※ 資料に基づき説明

<質疑等>

- ・ なし

(4) その他
(高橋課長)

※ 分散型市役所に関する庁内の検討状況について報告

<質疑等>

- ・ なし

(以上)

第5期地域づくり市民委員会（第3回）ワールド・カフェのまとめ

Aテーブル 「地域のつながり」「互助のあり方」

項目	意見等
地域の目をつくる	<ul style="list-style-type: none"> ・ 昔は子どもがよく遊んでいたが今はそんな姿をあまり見ない。 ・ 今は両親が働いていて面倒を見られないので、低学年は児童センターに、高学年は習い事に通う家庭が多い。中学生は部活で忙しい。 ・ 外で遊ぼうにも、公園ではボールを使ってはいけない、空き地で遊ぶと所有者に怒られる、川だと危ないと注意されるので遊ぶ場がない。 ・ 遊べる場があったとしても今は大人も外に出ないので、見守ってくれる人がおらず外で遊ぶのは危険 ・ 地域の目がない、あっても否定的に捉えられがちな時代。しかし目があるからこそ信頼のネットワークができ、そこから互助が生まれる。 ・ 公民館や福祉ひろば、児童館を遊び場としてうまく使えないか。
「こもる」から「開く」へ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 習い事をやめる訳にはいかないなので、例えば近隣住民が見学に行けるなど、習い事を地域に開いてもらう工夫ができないか。 ・ 地区の文化祭に子どものダンスが出てくれた。地域は習い事の発表の場になりうる。 ・ 習い事も地域に「開く」ことが大事。最近は何でも「籠る」傾向だが開くことでコミュニティができる。 ・ 昔の習い事は地域に根差していたが今は商業化が進み、大手フランチャイズの教室だと地域に開いてくれないのではないか。
世代を超えたつながりは地域から	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「しめ縄作り」「餅つき」「クイズラリー」など、世代間のつながりを生む様々なツールがある。 ・ 大人が「子どもたちに夢を見させたい」という想いを持ってそのようなツールを活用し機会を創出することが重要 ・ 事業者のつながりを活用するとツールの幅が飛躍的に広がる。 ・ 地域において、そのような機会は福祉ひろば、公民館、児童センターで多く創られている。 ・ ただ児童センターと町会・地区とのつながりは比較的弱い。 ・ 浅間児童センターは福祉ひろばや保育園が近いので、自然に世代間交流ができています。 ・ 施設の場所（立地）も効果を左右する大きな要素 ・ 学校では作られにくいタテのつながりは地域でこそ作られる。

項目	意見等
	<p>昔は地域にガキ大将がいた。</p>
<p>コロナ禍だからこそ…</p>	<ul style="list-style-type: none"> • コロナ禍で行事を避ける空気になっているが、敬老会を開催したら昨年度以上の参加があった。外に出たいという人は多い。 • 一度外出しなくなると出不精になって認知症やフレイルを進行させる恐れがあるので、様々な意見があったがひろば祭りでカラオケ大会をやり、結果として喜ばれた。 • むしろ今、絆が生まれやすい状態なのではないか。 • 地域の大人にはコロナを言い訳にして何でも中止するのでなくやる気を持ってできることを工夫してほしい。 • どうしても出ない。という人もいるがそれは選択の自由
<p>町会組織の形骸化</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 1、2年で「長」が交代する組織において、自ら問題提起して事業費を勝ち取り、主体的に動くということは無理 • 昔は町会長や常会長は名誉ある職で何年も務める人がいたが、今は持ち回りで名誉もなく誰も受けない。人選が大変で町会長は本当に困っている。 • 民生委員は厚労省、安協は県公安委員会など、行政の都合でやらされているという意識が蔓延している。 • 「副」を1期やったら「長」に上がるシステムにすれば、継続性が出て主体的な活動につながる可能性は高まる。 • 引継ぎの際、行事の日程や手法だけでなく「こういう目的でやっているのだから頼む」という引継ぎが重要 • 地域に担い手がいなくなれば行政がやるしかなくなるので、「町会の問題だから」ではなく市もこの問題に関わっていく必要があると思う。
<p>小さな範囲の顔の見える関係づくりから始める</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 規模にもよるが、町会長が町会住民と顔の見える関係をつくるのは困難。常会長なら多少はつくりやすい。組長ならば十分可能 • 小さい範囲なら、顔の見える関係づくりは名簿がなくてもやる気さえあればできる。 • 極論を言えば「何かあれば私は〇〇さんを助ける」という1対1の関係がそれぞれできていれば、相当な数の人を助けられる。 • 大きな組織論ではなく現場目線で考えてみるのが大事 • 新しい住民は隣人のことを知る取組みから始めることが必要
<p>まずは自ら始める</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 散歩をしていたらすれ違う人がみんな挨拶してくれて感動した。小さなことでも自ら始めてみるのが大事。まずはこちらから挨拶したいと思う。

項目	意見等
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 最初は見守り隊の大人に挨拶できない子どもも慣れてくるとするようになる。根気よく続けることが大事 ・ 子どもだけに挨拶しろと言ってもダメ、大人が自ら始めて地域全体に広げていくつもりでやらないと

Bテーブル 「多世代参加」「人材・人づくり」

項目	意見等
多世代参加が成立している場合は？	<ul style="list-style-type: none"> ・ 夏祭りや運動会。中学生は露店の手伝い、小学生・PTA もブースを出店、介護施設の入所者も車いすで参加する。 ・ 神社の例祭、三九郎などの伝統的な行事 ・ クラフトピクニック ・ 農業体験 ・ コミュニティスクール（現状は、学校の要望に応えるだけの学校応援団になっているが） ・ 清水中の総合学習では、子どもたちの学びを地域がサポートすることで、多世代参加の場ができています。
三世代が集えるイベントを	<ul style="list-style-type: none"> ・ ソーメン流し、餅つき大会、そばまつりなど、行事があれば子どもも親も参加する。多世代が参加できるイベントが必要 ・ 子どものときからそういった場に出ていると、大人になってからも出てくる。繰り返しやっていくことが大事 ・ とにかく回数を重ねるしかない。
大学生の地域参加	<ul style="list-style-type: none"> ・ 若い人はいても地域との絡みがない。アパートが多く学生も多いが、何年かするといなくなってしまう。 ・ 信大の周辺町会では、夏祭りや運動会に大学生が参加している。 ・ 年1回、信大生と地域との懇親会がある。過去には自転車マナー、テニス部の早朝練習の騒音問題などについて話し合った。 ・ 育成会の行事に、信大生がボランティアで参加している。
大学生が多世代参加に果たす役割	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもにとって大人は遠い存在。間に少し年上の大学生が入ることでクッションになるのではないかと。若い世代の長として、大学生に果たせる役割があると思う。 ・ まずは中学生と大学生をくっつけたい。 ・ 松本子ども未来委員会で、小、中、高校生のなかに大学生サポーターが入り、市長への提言をまとめていた。大学生は中高生にとつ

項目	意見等
	<p>て一番身近な将来のモデルだと思う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 松本は大学の多いまち。その力をつなげられるといい。 ・ 世代をつなぐような役割はまだできていない。大学生がさまざまな世代をつなげる“糊”のような存在になれるといい。
現役世代が参加するために	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「1に家庭、2に家庭、3、4が仕事で、5が町会」と言っている。町会は5番目。仕事で会議に出てこないことがあっても、周りは文句を言ってはいけない、ということを徹底している。 ・ 会合は土日、または平日の夜7時からにして、できるだけ多くの人が参加できるようにしている。
中学生、高校生が鍵	<ul style="list-style-type: none"> ・ 清水中の総合学習に関わっているが、まちに出て、人と交流することで子どもたちが変わっていく。 ・ 中学生が鍵。小学生と違って動ける。いざという時には助けにもなるし、戦力にもなるが、小学生ほど地域とつながっていない。 ・ 高校生は、さらに「まち」のことをかなり考えられる世代。中学生よりもさらに一段階上のことができる。
親をどう巻き込むか	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校の総合学習等を通じて、子どもと地域がつながりはじめているのに、親がそのことを知らない。 ・ これからは親をどう引き込んでいくか。学校と公民館で企画するまち歩きに、親も一緒に参加できるようになると面白い。 ・ 親も地域への関心が出てくれば、町会行事等に参加するようになるのではないか。
多世代参加の難しさ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 前提として人がつながっていない。地域生活者がいない。多世代参加、人づくりの前に人をつなげる必要がある。 ・ 新しい家が多く、若い人はいるが町会に入らない、行事にも来ない。地域との絡みが少ない。 ・ 多世代交流はしたくない、ヨコのつながりはほしいがタテのつながりはいらない、上の世代から子育てについてとやかく文句を言われたくない、といった意見も ・ 高齢者は、「俺たちの時代はこうだった」みたいなことを言いがち ・ 若い親とはこういうものだ、という決めつけもあるように思う。
自治と人づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・ 沢村児童センターは、白金町会でNPOを立ち上げて運営している。社協任せにせず、自分たちでやっているのはすごいこと ・ 自分たちでやることによって、知らないうちに「人づくり」「人

項目	意見等
	<p>材育成」ができていっているのでは？</p> <ul style="list-style-type: none"> 年金の受給年齢が引き上げられたことで、人（担い手）がうまくつながっていかなくなった。

Cテーブル 「地域を知る・学ぶ」「地域の枠組み」

(地域を知る・学ぶ)

項目	意見等
福祉教育&子ども	<ul style="list-style-type: none"> 核家族化などライフスタイルの変化により、地域の共助やつながりなど経験しない若い世代が増えている。だから何故地域？となる。子どもや若い世代が地域で生きているという実感が持てるような福祉教育が必要 障害のある方が1人暮らしをするには、地域の理解が必要 グループホーム建設時など、知らないことで「怖い」と拒絶してしまうことがある。 学校とタイアップした教育やイベントなどの仕掛けなど、知るための環境づくりが必要 白板地区放光寺町会の行事として行った、グリーンベルトの舗装。子どもが必要としているものをハブに、イベントの中で自然に関われる状況がよい。 地域と関わる、自然に学ぶ。 世代間交流があると自然と福祉教育に繋がっていく。きっかけを地区の中に作っていく。波紋のように広がるのが理想 子どもの時に地域を知ると、地域を大切にできるようになる。
伝統	<ul style="list-style-type: none"> 若い世代にどう引き継ぐか。また、多世代間の受け継ぎが難しい。 伝統行事は繋がるが、そのほか難しい。 NPOとのタイアップが難しい。 個々のよい部分を外へ広げていくことが難しい。 一人ずつの信頼関係など点と点を結び付けていく。良いところは繋がっていく。その時々で、できる事を行うことで繋がっていく。
看板学	<ul style="list-style-type: none"> 公民館の「看板学講座」。取材をして看板物語を書く。(店主の人となり)店を知ることになる。また、読むと行ってみたいくなる。 ＝学びは遊び心 看板は想いを表している。が、意外と知らない。

項目	意見等
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 興味のあることに、【問い】を立てることが大事 → 調べる・知る【行動】につながる → 人に伝えられるようにする【アウトプット】 ・ 問いを立てる機会が大切 = 「歩く」「まち歩き」→色々な人と色々な視点で ・ 絞ったテーマだとストーリーが広がる。ポジティブに捉えられる。

(地域の枠組み)

項目	意見等
選択	<ul style="list-style-type: none"> ・ 選ばれる地域と選ばれない地域がある。つまり偏りがある。(上土は松本大学が深く関わっているなど) 地域をどんな単位でみるのか?
つながり	<ul style="list-style-type: none"> ・ 昔からある「町会」だけではどうにもならないところが出てきている。 ・ 地縁の関係は希薄となっているが、興味の深い部分での繋がりもある。 ・ 枠組みを考えるのではなく、人を知ることによって繋がっていく。中心となるポイントを変えると枠組みが変わる。そこを繋げる。 ・ 重層的な枠組み
地域の縁	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地縁。今はあるのか? 家族や隣近所との繋がりも希薄化している。縁がないのに結べないということが大前提 (今の現状) ・ 車社会、ネット環境。現実的な繋がりがない。今の生活スタイルを直視する。 ・ 人と人が繋がることは必要か? 20年後は? ・ 繋がりへの価値観が変わっている。リアルな繋がり、リモートの繋がり ・ 歳を取った時に価値観が変わり、人との繋がりが必要だと思うようになるよう期待したい。 ・ 地域→町会・地区・商店街? 枠によって違う。